令和７年度小平市立小平第七小学校～「全国学力・学習状況調査」結果概要～

１　調査目的・対象

児童・生徒の学力や学習状況を把握・分析し、成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、今後の児童・生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てるための調査です。

２　調査内容

（１）教科に関する調査

身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等、また、知識・技能を実生活の様々な場面で活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関することを児童が答える調査です。

（２）生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関することを児童が答える調査です。

３　各教科の調査結果の分析

【国語】

状況の分析

- 「話すこと・聞くこと」以外の全ての項目で、全国平均と東京都平均を上回った。
- 目的に応じて文章と図表などを結び付けるなどして、必要な情報を見付けてまとめるという問題に対して無回答率が１５．８％と高かった。

課題

- 文章と図表を結び付けるなどして、必要な情報を見付けたりすることや、書く内容の中心を明確にし、文章の構成を考えることに課題がある。今後、相手に分かりやすい文章を書く指導が一層必要である。

学校で取り組む具体的な改善策

- 日記や学習感想など、授業や生活の中で日常的に書く機会を確保し、書くことに慣れさせる。
- 教科書等の文章から、構成や書き方のヒントを学ばせたり、書いたものを見直したりする時間を設定する。
- 学習者用端末を活用し、書くことへの苦手意識を減らすとともに、文章表現を推敲しやすくする。

【算数】

状況の分析

- 「C　変化と関係」の正答率が一番低く、東京都平均と比べて、5.4 ポイントの差があった。
- 「思考・判断・表現」の平均正答率は東京都と比べて 3 ポイント下回ったが、昨年度より差は縮まっている。

課題

- 基礎的な計算方法は理解しているが、比例や割合といった既習事項を用いて答えを導き出すことに関しては、十分とは言えない現状がある。
- 図形の性質を正しく理解したり、面積を求めたりすることに課題がある。

学校で取り組む具体的な改善策

- 倍や割合の学習では、数直線を自分の力でかいたり、簡単な数値を当てはめ、立式の方法を考えたりさせながら、正しく立式する力を身に付けるようにさせる。
- 図形の性質を教室等に掲示し、普段から意識できるようにする。
- 東京ベーシックドリルや授業前プリント「計算クエスト」などで既習事項を繰り返し練習する時間を授業の中で確保し、基礎基本の習得を図る。

【理科】

状況の分析

・全１７問中１１問で、全国平均と東京都平均の正答率を上回っている。
・「電気」及び「電磁気」の内容に関する問題で全国平均と東京都平均の正答率を下回っている。

課題

・正答率の低かった問題の評価の観点は「知識・技能」に関わるものが多く、用語や正しい実験操作などについての習得が不十分である。
・「電気」や「電磁気」「水蒸気」など目に見えない自然現象についての理解に難しさがある。

学校で取り組む具体的な改善策

・用語については、板書やノートへの記入のさせ方などを工夫して意識付けをするとともに、話合いや説明の場面では意識的に用語を用いることを指導し、用語の理解と習得ができるようにする。
・目に見えない自然現象については、モデル図や掲示物などを工夫して、よりイメージをもちやすいようにする。また、考えを書く際にも絵や図を用いて表現させることで理解を促す。

【質問紙】

状況の分析

・「自分にはよいところがある」という設問に肯定的な回答をした児童が 92.3％で、全国や東京都の平均と比べて大幅に高い結果となっている。
・学習者用端末を活用して文章やプレゼンテーションを作成し、自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができると感じている児童が多い。

課題

・放課後や休日に学習する時間が、東京都の平均と比べて、大幅に少なくなっている。
・「読書が好きですか」という設問について、肯定的な回答をした児童の割合が低い。
・「理科の勉強は得意ですか」「理科の勉強は好きですか」という設問について、否定的な回答をした児童の割合が多い。

学校で取り組む具体的な改善策

・家庭学習の習慣が身に付くように保護者と連携するとともに、学習者用端末を使った課題を出したり、家庭学習で取り組むことができるサイトやアプリなども活用したりしていく。
・図書の時間や、読書月間の取組、図書委員会のおすすめ本の紹介等を通して、児童が読書を楽しみ、日常的に読書をする習慣を身に付けることができるようにしていく。
・理科の学習に児童が意欲的に取り組めるように、授業を改善していく。また、理科の学習内容が将来にも役に立つということを、キャリア教育の視点もふまえ、全学級で指導していく。